

# 現代のアメリカ社会を支える日系アメリカ人について —

— ダニエル沖本とノーマンミネタを通じて —

Japanese Americans Supporting Modern American Society

— Danieru Okimoto and Nonan Mieta —

山本茂美

Shigemi YAMAMOTO

## はじめに

私がダニエル・沖本を知ったのは、まだ学部生の時であった。当時は1924年の排日移民法について研究をしていたが、多くの歴史的記録を探るうちに、日系人の生の声を知りたいと思うようになった。しかし、当時はほんの少しの文学作品しか見つけることができず、さらに日系人の共同体で発行されていた新聞もなかなか入手できなかった。そんな状況が長く続いた後、少しずつ日系二世が活躍するようになっていった。その中の一人がダニエル・沖本であった。しかし、自分の研究の対象が戦前の日系アメリカ人の処遇であったこともあり、なかなか本の内容を深く研究する機会はなかった。

その後は、日系アメリカ史から日系アメリカ文学作品の研究が中心となり続き二世三世の作家の作品を中心として調べていたので政治家の自叙伝は歴史的一次資料としてのみ活用してきた。しかし、昨年春から一年間サンノゼに会社の研修で出かけていた長男が帰国後日系アメリカ人の書物の中にノーマンミネタの資料がないか探し始めた。サンノゼを中心にとっても有名な日系アメリカ人だという事

であった。自分の研究の中に、彼の存在を認識することがなかったが、彼について調べることにした。すると奇しくも彼の活躍の横にダニエル沖本の活躍が重なり合っていた。さらに昨年研究したダニエル・イノウエとも深く関係があることが分かった。<sup>1</sup>そこで日系アメリカ人の中で政治家として活躍した三人の中で特に昨年研究したダニエル・イノウエ以外の二人に焦点を当てていこうと考えた。ノーマンミネタについては彼の作品をみつけることができないので、彼と対談した俳優や、記者の記事も参考にしたいと考えている。

## 1 ダニエル・沖本とその作品

日系人の地位向上と日本を代弁する国際政治経済学者となったダニエル・沖本が生まれたのは1942年カリフォルニア州サンタアニタ仮収容所で生まれた。両親が内陸部の移住センターに移される途中に生まれたということである。その後日系人の地位向上に力を発揮し政治家として活躍することになるのは此の出生も起因しているのであろうか、ともあれ彼は幼い時を収容所で過ごすことになった。牧師の父のもと、他の日系人のように勤勉で、

しかしなぜ自分たち日系人だけが収容所に入れられたのかという思いに悩み続けたという。さらに白人と白人社会とかけ離れた自分を、一体何者なのだろうという疑問と絶えず向き合ってきたという。

日系アメリカ人には二世だけで共同体を作り同じ日系人と結婚して日本の習慣を守り日本人町の形成を望むグループと、日系人だということを忘れ白人と付き合い結婚して子供も白人と結婚させたいと願うグループがいる。ダニエル沖本は後者だと考えられる。幼いころを強制収容所で過ごした彼は、他の日系人同様に、勤勉に少しでも白人社会に認められようと日々を過ごしたことであろう。

幼児期に差別を受け、自分の育つ家庭の環境が白人家庭のそれとは違う中で、自分は何者なのだろうかという思いはさらに深まっていったと述べている。彼は、自叙伝で自分の経験をこのように述べている。

「白人女性とつきあえば、白人は自分たちのもの、という白人男性の視線を感じずにはいられなかった。沖本が白人女性の家までいけば、『ミスターモトが来ているよ、』とか、『娘に近づかないでくれ』とまで言われる。ミスターモトとは1930年代に生み出された小説の主人公で、後に映画化され、白人によって演じられた日本人のスパイである。今でもアメリカで日本人、あるいは日系人の代名詞のように使われる。」<sup>2</sup>このような体験により自己防衛の本能が芽生えたと彼は述べている。しかし彼は何とかナンシー・ミラーという白人女性を結婚相手に選ぶことになる。彼女との出会いがなければ最後まで自己防衛本能意識が消えることはなかったであろうと述べている。彼を含む日系アメリカ人、特に戦前戦後の二世たちは日本の国際的イメージや行動はアジア系アメリカ人としてのアイデン

ティティーの問題と深く絡み合っていたとも述べている。一度も行ったことのない日本、一度も関係がなかった日本がアメリカ人として生きている彼ら二世の人生に大きな影響を与え続ける矛盾は彼らの人生を大きく左右し続けてきた。

先にも述べたようにダニエル沖本は優秀な学生であったので白人が大多数が占めるパサデナ高校を首席で卒業し南カリフォルニア日系人商業会議所の日米修好百年記念第一回奨学金を受賞して、1960年に名門プリンストン大学に進学して、1965年に優秀な成績で卒業した。以前に研究した日系コミュニティの新聞『羅府新報』によると、沖本氏は当時から日系社会の誉れ高き秀才少年だったという。その後ハーバード大学の大学院に進学し1967年に東アジア研究で修士号を取得した。1968年から1970年まで東京大学大学院で国際関係論の研究生として留学している。ほとんど同時期の1967年から1971年までアメリカでも屈指の有名シンクタンクであるランド研究所のコンサルタントを務めた。1977年にミシガン大学から政治学博士号を取得後、1977年からスタンフォード大学政治学部で教鞭をとっている。

このように卒業して、自然と白人社会に溶け込み、白人との生活をうまくやっていけるようになったが自分だけが黄色人種であり幼い時に差別をされ続けたことはいつまでも疑問に思い続けたという。どの日系アメリカ人もたとえどんなにエリートと言われても満たされない虚しさを持ち続けたのである。<sup>3</sup>

彼が日本にやってきたのはおりしも大学紛争のさなかだった。そのため彼は研究の間に時間を見つめることができ『仮面のアメリカ人』という自叙伝を書きあげることができたという。さらにこの時代は合衆国ではベトナム戦争のさなかで、来日する際アメリカ政府

から徴兵された場合にそれに従うかに迷ったという。これは第二次世界大戦中のアメリカに忠誠を誓うために442部隊に参加するか迷った日系人と同じ気持ちだったと回顧している。その時アメリカ人として祖国を攻撃出来なかった多くの二世たちは帰米という形でこの問題を回避している。奇しくも日本にやってくるようになった彼は、この立場と同じ位置に立つこともあり得たということかもしれない。もちろん来日前日本に住むことなど選択肢にあるわけはなかったであろうが。

この本の初めにダニエル沖本はこのように述べている。

「本書が刊行されてから数カ月たったころ、私はいくつかのラジオやテレビ番組に出演して『仮面のアメリカ人』の中で表現した考え方や思想を広く米国各地の視聴者を対象に論じて欲し、という依頼を受けた。…

仮面のアメリカ人に描かれた米国像に心から同意する人は大勢いたが、他方では私が書いた批判、とくに人種偏見の名残、社会的不平等の証拠、ベトナム戦争介入をめぐる米国の愚行などを非難した私の論拠を受け付けない聴衆もいた。…

私が驚いたのは、これらの番組で期せずして表面に出てきた、実に不愉快な潜伏性の反日本人偏見である。…『真珠湾を爆撃したのは一体誰なんですか』あるいは『日本人のアメリカ人を処遇するやり方は、われわれが彼らをもてなすやり方より悪いんじゃないですか』という尋ね方である。』<sup>4</sup>

ダニエルはアメリカ人として堂々と生きていた。しかし残念なことにアメリカ人の中には日系人は日本人と同じとしかとらえていない人が多く、いつまでもマイノリティに対する差別は消えていなかったのである。

「不幸にして編集上の枚数制限のため、本書では私の日本に関する印象を十分に記述す

ることができなかった恨みがある。日本の国際的イメージや行動は、言うまでもなくアジア系アメリカ人としての私自身の自己認識の問題と深く絡み合ってきた。本書の中にも出ているとおりに、日本に対する私の気持ちには、愛情と不快、親密さとよそよそしさといった、相互に矛盾する感情が混在している。そこに住んだことがあって、それだけにとりわけ強い感情を抱いている人間社会について、ある程度の欠点を認識しないで済ますことは困難である」<sup>5</sup>

彼はこのような気持ちをこの本にぶつけているのである。本書の最初には、日本にいる親族との衝撃的な出会いを書いている。

「私はそのとき、予期しなかったほど興奮していた。場所は羽田の東京国際空港待合ロビー。私の到着を待っていた親類縁者めがけて、私はほとんど突進する勢いだった。

私は駆け寄りながら右手を出して、いつでも握手出来る用意を整えたが、待っていた人たちはそれには応えず一斉に深く頭を下げてあいさつするのだった。』<sup>6</sup>この体験が日米の文化の違いをはっきり認識するスタートになったということだろう。

戦後初めての日系人の自叙伝といわれるこの本の中には当然差別に苦しんだ日々の生活が書かれている。多くの当時の日系人の思いや事件も書かれている。しかし、筆者は日本を代弁する国際政治経済学者となったダニエル沖本のバックグラウンドに注目したい。

「私に階級別のレッテルを張りたがる日本人たちは、こちらが戸惑うような丁寧さをこめて、『あなたのご両親は何をされていますか。』『日本のお里は、どちらですか。』『ご両親は大学へいかれたのですか』としつこく尋ねることもあった。中にはもっとはっきりと『あなたのご両親は百姓ですか』と聞く人もいた。奇妙なことだがこういった日本人らし

くない無作法な質問をする人に限って、外国の生活を一番うらやましがった。…

親戚の家をまわるといふ義理には時間がかかるが、親族こそは日本に二世として滞在する体験の中で最も報いの多い側面を代表しているのである。親族一同が集まることによって生まれる暖かい親睦に加えて、大家族的な社会構造のなかに入り込んで本当の日本を体験するために、格好の通路を親戚縁者は作ってくれる。」<sup>7</sup>

日本人の血が流れていることを知って肯定的に思うことなく過ごした彼が自分のバックグラウンドを肯定的に考えられるようになった瞬間だったろう。さらに此の本の中でこのように述べている。

「いとこの家に来て初めて自分の祖先の歴史を総合的に知った。両親の背景がいかに珍しいケースであるか知った。父も母も日本でどんな生活をしていたかあまり話してくれなかったから、私は岩国で二人の結婚当初のころ勘当された事、米国に移民した事情などを聞かされて非常に驚いた。…

岩国での一週間は、また東京にいただけではわからなかった別の日本を知る機会にもなった。古い慣習のなごり、社会的パターンを垣間見ること、世界有数の優雅な詩歌を生んだ美しい自然の景観、素朴な人情と親切…といった体験は私にとって忘れがたい田園生活の思い出である、この日本で見たものはこれらの島々に何世代にもわたって住んできた人々が、私自身の過去にも深くつながっているという意味で、新しい誇りを感じさせるものである。」<sup>7</sup>

ダニエル沖本が現在アメリカ社会で活躍する中で、日本を理解し正しい見解で政治のかけ取りをする背景にはこの体験が大きく影響していると考えられる。さらに彼は次のように述べている。

「ほとんど二世と同じく、現在と未来をつなぐ直観的な世界に生きていたのだ。アジアの祖先の故郷に帰ってくることによって新しい水平線が現れたのであり。新しく開かれた自分の中にある東洋の過去の世界は、私の人生観に三次元的な輪郭を添えるものとなった。

こうして突然の自分の家族の過去を認識することによって、私の慢性的に苦しんできたアイデンティティーの問題をめぐる精神分裂的な悩みが、ある程度治療できることともわかってきた。日本に住んだ結果、私は自分が個性においても志向においても、全くのアメリカ人であることを意識するようになったが、この効果はほかにどんな方法を使っても期待できなかつただろう。しかも他方では、日本に住んだおかげで、自分と日本および人種的背景とのつながりに対しても、ずっと抱えてきた無知から来る嫌悪感を、私は脱却することができた。…

実際のところ、私が自分の中の、日本人性を、当惑や恥じらいを感じることなく自認できるようになったのは、祖国の国で数年間暮らしてみた後の事である。そして自分の人種、民族的背景を積極的に受け止める事によって、私は初めて、あなたのお国はどこですかという質問に、ためらうことなく答えることができるようになった—私は仮の誰かではなく、正真正銘の日系アメリカ人である。」<sup>7</sup>

多くの日系アメリカ人の中で、実際先祖の国を訪れ滞在する機会を与えられるものはごくわずかであろう。さらに、実際親族と触れあい祖国の多くの経験ができるものはさらにわずかであろう。ダニエル沖本は、この貴重な経験をする事で、自分に自信を持ち、アメリカに渡った両親の勇気に心を配り感謝することができたのであろう。



## 2 ダニエル沖本の活躍

さてこのような体験をして、自分に自信を持ってアメリカ社会に生きてきた沖本は、その後大学教授以外でも財務系の日本開発銀行（現在の日本政策投資銀行）の顧問を務めたこともある。現在ダン・オキモト・コンサルタントの会長兼CEOとして活躍している。又メジャーリーグ球団サンディエゴ・パドレスの役員である。2007年には春の叙勲で、旭日中綬章を受賞している。奇しくもこの年同じ春に叙勲で、旭日大綬章をノーマン・ミネタ元運輸長官が受章している。

彼の活躍については後に述べるが合衆国内で日系アメリカ人が政治の世界で活躍するのは容易なことではなかった、そこで今でもハワイ州とカリフォルニア州のみしか連邦議会の議員はいない現状である。この2州には多くの日本人がいる。そこでは連邦上院議員、下院議員、州知事などが誕生している。日系人の政治家の代表としては昨年研究したダニエルイノウエ元民主党上院議員が代表的であるが、そのほかにも最近ではサンフランシスコを中心とした政治ネットワークがあるという。「日系人」と書くことは本当に彼らにとって喜ばしいことではないと思うが、厳しい差別を乗り越え合衆国の社会で認められていった努力は他の移民たちの現状から考えても本当に素晴らしいことであると考えている。

ダニエル沖本は日本の専門家としての立場から『通産省とハイテク産業』（渡辺敏訳、サイマル出版会、1991年）という日本政府研究の本を書いている。この本はチャルマーズ・ジョンソンが対比させた日本（計画合理性国家）とアメリカ（市場合理性国家）の間にあるのが日本の本当の姿であるという主張が込められているという。官僚による指令経済でもなく、又完全自由経済でもなく単純な

二つのモデルとは違うのが日本であるという要旨である。経済については専門でないので詳しいことはわからないが、日本について深く研究しているからこそ書ける日本を正しい目でとらえられた著書であると考えている。このように日本の専門家としての立場から、日本に対しての不安を述べるのではなく、米国が辛抱強く見守り、協力関係を築いていこうと述べている。それがクリーンテクノロジーや不況からの回復になると推測していた。

さらに2009年駐日大使がなかなか決まらなかった時、力を発揮したのもダニエル沖本だったという。彼はスタンフォード大学を卒業後シリコンバレーで弁護士をしていたルース氏に話が来た時、彼に多くの日本の情報を伝えて後押ししたという。

「彼は25年以上にわたる付き合いで、多くの事について話し合った。われわれは、駐日大使の地位に就くプラスマイナスについて話し合った。」と副島隆彦とのインタビューの中で語っている。

当時大統領に直接話せる駐日大使、その後ろで支える日本の専門家、そして当時の総理大臣までスタンフォード大学の関係者であった事は、政治の世界で注目される事実であったという。ともあれダニエル沖本は日米間で様々な不安定要素が起きた時、公平な立場でしかし両親の祖国に対して何かしら温かい視点から解決策を模索していったと言えよう。米国には数限りない日系人が存在しそれぞれ活躍している。しかし日本との関係を常に意識して活躍するダニエル沖本の背景には、日本で体験した親戚たちとの温かい触れあいが大きく起因していると考えている。彼の著書は我々日本人がもっと正しく日系人を理解し彼らが味わった苦しみの一因に大きく関係していることを忘れてはいけなくて教えてくれていると考えている。

### 3 ダニエル沖本とノーマンミネタ

さて先に述べたノーマンミネタについて紹介したい。彼については本人が書いた文学作品があるわけではない、しかし彼は米国の政治の世界で大きな役割を果たしている、筆者が彼の存在を知ったのは最近のことである。最初にも述べたように長男が、多くの日系関係の資料が並べられた書棚の本を何冊も調べた後「なぜノーマンミネタの本がないの、彼はサンノゼではとても有名な日系人だしサンノゼの空港の名前にまでなっているのに。」と言ったことがきっかけである。文学作品を中心に研究していたので政治関係の日系人の活躍を見逃していたことを反省し改めて彼の活躍を調べていった、日本では、俳優によるノーマンミネタとのインタビューや講演社の日経ビジネスの中の対談で彼の活躍や彼の考え方過去の暗い体験などを知ることができた。

彼は、1908年に渡米した静岡県清水町出身の父国作と三島市出身の母かねのもとカリフォルニア州サンノゼで2男3女の末っ子として生まれた。第二次世界大戦中はワイオミング州のハートマウンテン日系人収容所に収容され、ここに慰問に来たボーイスカウト団員のアラン・シンプソン（後のワイオミング州選出上院議員）と知り合ったことが彼の人生を大きく動かした。1971年にはハワイを除く米国本土では日系人として初めて、大都市サンノゼ市長に当選した、1974年には同じく本土で初めて米国下院議員に当選した、1955年まで20年以上下院議員を務めその大部分を運輸委員会に所属した。又1988年のCivil Liberties Act「市民的自由法」<sup>8</sup>成立を陰で支えたという。その後ロッキード・マイティン社副社長を経て、2000年から2001年までビル・クリントン政権で商務長官を務め2001年から

2006年まで共和党のジョージ・ブッシュ政権でも運輸長官に任命され最長任期を務めた。このためミネタの長年の功績を顕彰して、サンノゼ国際空港はノーマン・ミネタ・サンノゼ国際空港と改称されたという。

彼は2001年9月11日のテロの時運輸省でニューヨークの事件を知りホワイトハウスに呼び出され、ホワイトハウスの地下危機管理センターで対応にあたることになった。連邦航空局の担当者と状況を取合っていた彼は、アメリカ史上初めて全民間航空機の緊急着陸を命令、国内を飛んでいた4638機の飛行を2時間20分ですべて強制的に着陸させた。「すべての航空機を着陸させろ」と命令しただけでなくアメリカに飛んでくる飛行機の受け入れを拒否し、ヨーロッパやアジアから飛んでくる飛行機の受け入れをカナダに依頼した。さらにその後、暗にイスラム教徒やアラブ系を対象とした必要以上の厳しい法律が成立する中、彼は第二次世界大戦中強制収容所に入れられた体験からそのような不当な法案成立反対の立場は変わらなかったという。一方でそれまで空港での安全対策は航空会社の自主性に任せていたが連邦航空局に安全検査を一括し、連邦政府職員による全航空会社搭乗者を対象とした検査強化をした。

ダニエル沖本は強制収容所の経験やその後の差別に苦しんだがその後日本に対する自分の見方が変わり、後の人生で日米の懸け橋になった。一方ミネタは戦後座間のキャンプに将校として駐留したが、日系人であることで差別を受けたという。日系人でも日本国籍を取得したものやそうでないものの扱いがあまりにも違うことを彼は強く感じたのである。さらに彼は滞在中「日本では食べていけなくて移民した日系一世の子」という二世を見下す視線を感じていた。日系移民を親に持つ二世は、戦争中は米国内で敵国を祖国に持つ者

として差別を受け、戦後は親の祖国日本で差別を受けるといふ現実にはぶつかったのである。在日韓国人も在日中国人も日系人に対してと同様に帰化しないと認めない日本社会の中で苦しんできたことを彼は知る。ミネタはこう述べている。

「私は日本のルーツを誇りに思う。けれども日本社会の持つ人種や国籍への偏見は辛かった。」<sup>8</sup>

彼はこの差別の体験をいかなる他の人にもこれ以上味わってもらいたくないと思ったからこそイスラム教徒やアラブ人を守ったのである。彼は95年「マーティン・ルーサー・キング・ジュニア賞を受賞している。

## 終わりに

私たち日本人は同じ顔を持つ日系人に対して外国人なのだという意識が薄いのではないかと思う。彼らは立派なそれぞれの国の国民である。戦後70年の月日が流れ戦争の傷跡を知らない若者が多くいる。今後機会を見つけては今まで研究した中で知った真実を、日系人の苦勞を伝えていきたいと考える。戦後初めての自叙伝といわれる『仮面のアメリカ人』という本を通じて、改めて戦中戦後の体験を知るだけでなくその後苦勞そして逆境の中で頑張り続ける人々の姿を知った。あの世界を震撼させた9・11のパニック状態の中で冷静にアメリカ人を守り差別を少しでも減らすように努力したのが同じ祖先を持つ日系人だったこと、日米関係が円滑に進むように尽力を尽くしているのが日本人を祖先に持つことに自信を持ち、堂々と生きようと決めた日系人である事を喜ばしく感じるべきだと考える。今回ノーマン・ミネタの存在を教えてください。長男にも感謝したい。ノーマン・ミネタの貴重な体験や活躍のおかげでサンノザを中

心とした1年間のアメリカでの生活で人種差別を強く感じることなく嫌な思いをあまり味わうことなく長男が無事日本に戻ってこれた事を深く感謝したい。彼は奇しくもノーマン・ミネタ国際空港から帰国した。

今まで日系アメリカ人作家による文学作品をいくつか研究してきたが日系人の枠を超えた作品が増えている。今後はアメリカ文学作品の中でアジア系アメリカ人、特に日系アメリカ人がどのように描かれているか研究していこうと考えている。

## 注

- 1) 昨年筆者は金城学院の論文集でダニエル・イノウエはダニエル沖本の政治家としての人生の師として米国の日系人の存在を確たるものにした。
- 2) ダニエル・沖本、山岡清二訳、「仮面のアメリカ人」、pp72-75
- 3) この内容は、Tatsuya Sudoの「ダニエル・沖本—日本を代弁する国際政治経済学者」のページから引用
- 4) ダニエル・沖本、pp2-pp3
- 5) ダニエル・沖本、p4.
- 6) ダニエル、沖本、p11.
- 7) ダニエル・沖本、p204.
- 8) Civil Liberties Actの内容については筆者の修士論文で詳しく研究した。
- 9) NHK「渡辺謙 アメリカに行く…9.11テロに立ち向かった日系人」のインタビューの中でミネタが語った内容を引用。

## Work Cited

ダニエル・沖本、山岡清二訳「仮面のアメリカ人」、サイマル出版、サイマル出版社、1971.

Danieru I Okimoto, American in Disguise, John Weatherhill, Inc, New York and Tokyo, 1971.

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%8E%E3%83%BC%E3%83%9>

<http://g.2kodansha.co.jp/10955/10976/14009/14010.html>

<http://d.hatena.ne.jp/nsw2072/20110719/p4>

<http://www.fujisankei.com/norman-mineta-story.html>

<http://soejironbun.sakura.ne.jp/files/ronbun200.html>

[http://jiro-dokudan.cocolog-nifty.com/jiro/2011/08/nhk...911\\_a262.html](http://jiro-dokudan.cocolog-nifty.com/jiro/2011/08/nhk...911_a262.html)

ダニエル・沖本—日本を代表する国際政治経済学者

<http://www.discovernikkei.org/en/journal/article/3388/>

<http://www.asyura2.com/12/1lunchbreak52/msg/303.html>

山本茂美, 442部隊の真実, 一日系アメリカ人最初の上院議員ダニエル・イノウエの自叙伝を中心に—, 『金城学院論集』人文科学編, 第10巻第2号, 2014年3月

### Work Consulted

北村崇郎, 『一世として生きて』, 草思社, 東京, 1992.

黒川省三, 『アメリカの日系人』, 教育社, 東京, 1979.

鶴田真, 『日系アメリカ人』, 講談社現代新書, 東京, 1971.

村上由見子, 『アジア系アメリカ人』, 中央公論社, 1971.

若槻康雄, 『排日の歴史』, 中央公論社, 東京, 1971.

<http://news-log.jp/archives/5950>

前山陸; ハワイの辛抱人, お茶の水書房, 東京, 1986.

<http://www.foxnews.com/politics/election>

</candidate/Daniel-ken-inoue/>

ジョン・オカダ, 中山容訳; ノーノーボーイ, 東京, 1981